

戯作類における唐音表記

矢野, 準
静岡女子大学文学部助手

<https://doi.org/10.15017/12098>

出版情報 : 語文研究. 44/45, pp. 77-90, 1978-06-01. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

戯作類における唐音表記

矢野 準

一
う。以下そのための手順を少し考えてみることにする。

中国僧の渡来などで黄檗宗がわが国の文化的中心地に普及し黄檗僧の唐音が聞かれはじめてきた近世前期のころより、徂来学派の唐話習得要請と長崎の唐通事の影響による岡島冠山の如き長崎出の唐話通や大潮の如き長崎遊学の学僧などの東上とが結びつき唐話学が大流行しはじめたことは先学により詳しく述べられているところである。^(注1) その結果、宝暦・明和のころまでには「建泰余話」や「四鳴蟬」等々に見られる如く戯作の世界に唐話が一趣向として取り上げられるに至った。^(注2) その戯作類の中には唐音かなの付されるものまで出現した。

この様に戯作の世界にまで浸透した近世唐音に関しては、黄檗関係の資料や冠山系語学書などの唐音研究がある程度^(注3)でこれまで調査研究が及んでいないようである。そこで戯作における唐音かな表記の実態を調査略述することにより唐音研究の一助としたいと思う。

二
ところで、唐音研究にあたって文献を相手として考える限りは△文献の唐音資料としての意義を明らかにすること▽が基本である

何といっても、まず第一歩は「各文献ごとの具体的な表記事実があるがままに整理して記述す^(注4)」ることからはじまろう。その一方法として所謂「字音（かな表記）表」^(注5)を作成することなども考えられる。とにかく△各文献ごとの具体的な表記事実があるがままに整理把握▽した上で種々な検討を加え△文献の成立に関与した人物（単純化すれば作者）の執筆目的・執筆姿勢などを明らかにしその文献の音韻史への貢献度をみきわめる▽ことが基本の最終目標となる。これには大局的見地に立った名人芸が必要なのであるが、名人芸をもたぬ筆者にとつては、その目標に近づくために次の三方面からの検討を行なうことが必要であろう。

(一) 当該文献の作者に関する伝記的研究

(二) 当該文献と他の文献との影響関係の研究

(三) 当該文献の内部徴証に関する研究………これは△唐音をどれだけリアルに書き記そうとしているか▽という作者の姿勢や△唐音に対する知識が十分にあるか▽という作者の信頼度を文献の内部徴証から判定しそれによって文献の音韻資料としての価値を明らかにしようとする試みのことである。その際に、前述した△表

記法の実態把握^㉒が大きくものをいうわけである。^(注1)ところでその試みの判断材料となるべきものを略述すると次の如くである。

A 近世の唐音かな表記に含まれる不純な要素の検討

(1) 唐話に関する知識不足などの原因による^㉓誤った表記形などの有無^㉔

(2) ^㉕吳音・漢音的要素の混入の有無^㉖

(3) ^㉗中世の唐音表記の影響の有無^㉘

右の条を考えるにあたっては近世の唐音表記一般の目安をもっていなければならぬわけでもある。^(注2)

B 近世の唐音かな表記法についての検討

(4) 唐話という外国語の音を書記するための^㉙表記法上の工夫の有無^㉚あるいは書記にとりくむ姿勢の真剣さの深淺

(5) 字音表記法上の伝統などの影響による^㉛表記形式・表記法の固定化の有無^㉜

C その他

以上の如き三方面からの成果を総合的に判断し^㉝文献の成立に關与した入物の執筆目的・執筆姿勢などを明らかにしその文献の唐音資料としての意義を明らかにすることによって音韻史への貢献度をみきわめる^㉞ことができた場合、唐音表記を手掛とした音韻史上の問題などを考察し得るのみならず戯作の言語的写実性の信頼度を考える一助となし得ようし唐音かな表記の実態を通し戯作に於ける表記法一般の実態を考える端緒^(注3)ともなし得よう。^(注4)

三

さて、右の如き方法論によるとすればまず^㉟戯作に於ける唐音か

な表記の実態を調査記述すること^㊱からはじめねばなるまい。そのためには「唐音かな」の付された戯作を文献として取り上げねばならないこと勿論である。ところで、「唐音かな」の付された戯作にはどの様なものがあるだろうか。筆者の知るかぎりでは次の三作品がそれに該当する。

(1) 「とうしんのねこと」(唐人の饗宴)「全二巻全十丁の青本。絵師富川吟雪^(注5)。小池氏によれば成立は「明和七年かあるいはそれ以前」という。田原藤太夫なる唐話通と藤原秀郷とが竜宮の王の依頼により竜宮を侵そうとする三上山の蜈蚣とその一党を退治するという話。その冒頭の一丁表裏に田原藤太夫が唐話を話す場面などがあり唐話の部分の右に「唐音かな」が付されているのである。東洋文庫蔵本のコピーによる。

(2) 「訳文由縁看月」(ヤクブンユカリノツキミ)「杜遷介訳。宝曆八年上方刊。当時流行していた蘭八節を白話訳したものの。訳詞の左側に蘭八節の原文右側に「唐音かな」が各々付されている。国学院大学蔵本の写真による^(注6)。

(3) 「和唐珍解」(ワトウチンカイ)「朱棗管江漢文序、四方山人赤良和序、唐来参和作。洒落本。天和五年跋の板本。唐人李踏天や唐通事和藤内などの長崎丸山遊廓での遊びを唐話を交えて描いたもの。その唐話部分の左側に該当する和文右側に「唐音かな」が各々付されている。また漢文序にも「唐音かな」が付される。「大東急記念文庫善本叢刊三」所収の影印を利用し京都大学蔵本を参照した。

寡聞にして筆者は「唐音かな」の付された戯作を右の三作くらいしか知らない^(注7)。御存知の御方より御教示いただければ幸いである。

ところで、本来ここで右の三戯作の「字音（かな表記）表」などを示すのが順序であろうが量的に無理が伴うため手元にある「字音表」より必要と思われる部分を表Ⅰ～Ⅳ表で示すにとどめ完全なる「字音表」の発表は今後の機会にまわりたいと思う。そしてここでは、前記三戯作について二(三)「内部徴証に関する」実態報告をすることにす。その際、参考のために非戯作で作者が真面目な姿勢で書いたと思われる「忠義水滸伝解」（陶山墨者、宝曆七年刊）・「唐詩選唐音」（劉遵付音、安永六年刊）を参照しながら考える。

なお、ここでは直接ふれないが二(一)「当該文献の作者に関する伝記的研究」や二(二)「当該文献と他の文献との影響関係の研究」も忘れることのできない問題である。……杜遷介という戯名に隠れ正体不明である「訳文由縁看月」の作者の正体を明らかにする仕事や「とうしんのねこと」の作者富川吟雪・「和唐珍解」の作者唐来参和と序者朱栞管江などの唐話に関する語学力を明らかにする仕事や「とうしんのねこと」と浮世草紙「世間学者気質」（無跡散人作、明和五年刊）との影響関係を明らかにする仕事など必要不可欠のものである。

筆者にとり特に手薄なこれらの問題については、近世文学のこの方面の御専門の方々の御研究の成果等御教示いただきたく思う次第で今後にまわりたい。

四

さて、二(三)Aから二(三)Cまでに関して前記戯作三作の検討結果を略述することにする。

四A(1)△誤った表記形などの有無▽……「誤った表記形」という判

定がかなりむづかしいわけであるが、まず第一として先学により既に紹介されたところの△「唐音を弁する名目」などという当時世に流布していた唐音法則の乱用の結果成ったと思われる表記形の有無▽を検討した。そのために「唐音の何たるかをも辨へない人々がその法則を濫用し、漢呉音から機械的に唐音を作り出し」た「甚だしい例である」とされている「華音韻鏡」（文化開刊）の表記例などを参考にした。その結果として①效・流撰のン表記②「嬌」（候韻見母、キヤン）（「訳文由縁看月」）③「體」（兼韻見母、ナヘン）（「和唐珍解」）

④仮撰の〇表記⑤「鴉」（麻韻二等影母、ヲ、）④「嘉」（麻韻二等見母、コウ）（両例とも「訳文由縁看月」）

⑥蟹撰のン表記⑦「桂」（若韻見母合口、キン）（「和唐珍解」）⑧泥母のタ行表記⑨「耐」（代韻泥母、トイ）（「和唐珍解」）

などの表記例が認められた。しかし、これらの「誤った表記形」は同一分類集団全体として認められるものではなく個別的である（表Ⅰ～表Ⅳを参照のこと）。また、この「表記形」の原因を全て「唐音を弁する名目」の誤った適用に帰すことはできないようである。他の要素とのからみあいによると考えるべきものもありそうである。例えば①「嬌キヤン」ごときは「講」（講韻見母）からの類推という要素も含まれていよう。ところでこの類の「誤った表記形」は戯作のみならず「忠義水滸伝解」（忠と略記）や「唐詩選唐音」（詩と略記）などにもかなり多量に認められるものである。①の例として「潦リヤン」(忠)・「吼ホン」(忠)・「劉ロン」(忠)・「」・「」の例として「麻モウ・モフ」(忠)・「詐ツツ」(忠)・「」・「」の例として「猜チン」(忠)・「計キン」(詩)・「薊キン」(詩)・「」・「」の

例として「泥テイ〔忠〕」等があげられる。さらには戯作では認められなかった△止撰のe表記▽「只チエ〔忠〕ツエ〔詩〕」までも認められる状態である。

第二に、△軽唇音と重唇音との区別が曖昧であることの結果成ったと思われる表記形の有無▽を検討してみた。この点で問題となるのは軽唇音のバ行表記の有無であろう。さすがにこの類の表記は少なく次の例一件のみであった。①「不〔物類非母〕ブツ」〔釈文由縁書月〕この「不」については「忠義水滸伝解」・「唐詩選唐音」でも「不ボ〔忠〕〔詩〕」とありこれだけは軽唇音の中でも特殊な性格をもつようである。ところで「忠義水滸伝解」や「唐詩選唐音」では、この他に「返ペン〔詩〕」・「坊パン〔忠〕」の例が認められる。

第三に、「へん」や「つくり」など△字形からの類推の結果から成ったと思われる表記形の有無▽を検討してみた。これは所謂「百姓読み」の類といえようが、前述の「構」字の場合のように他の要素との関係もあり面倒であるが次の例などはそれに部分的に該当しそうなものである。②「擬〔代韻聲母〕キイ」〔和唐珍解〕である。

「iイ」表記の部分については「疑〔之韻聲母〕」の類推と考えられる。が「疑」の場合には「ニイ」とされるのが唐音としては自然なようであるからカ行表記をそれで説明するわけにもいまい。次に述べる「呉音・漢音の影響」といったものを付け加えて考える必要があろう。この類の例はこういったものくらいである。

以上の三点が筆者の当面気付いた「誤った表記形」である。これらのものから判断すれば戯作と呼ばれる側の作品にかえて不純な要素の少ない傾向がうかがえるわけで誠に興味深い。

四A②△呉音・漢音的要素の混入の有無▽を検討した結果……

①漢音表記そのままが混入したと思われる場合②③「雷〔仄韻来母〕らい」〔とうしんのねこと〕④「萬〔韻韻聲母〕ばん」〔とうしんのねこと〕⑤「琴〔侵韻群母〕キム」〔釈文由縁書月〕⑥「喃〔咸韻端母〕ナム」〔釈文由縁書月〕⑦「猷〔韻韻曉母〕ケン」〔和唐珍解〕⑧「下〔馬韻二等聲母〕カ」〔和唐珍解〕

⑨呉音表記そのままが混入したと思われる場合⑩「座〔通韻從母〕ざ」〔とうしんのねこと〕

⑪漢・呉音的要素が混入したと思われる表記形⑫「嬢〔韻韻聲母〕シヤン」〔和唐珍解〕

などが認められる。このうち⑬「下カ」については発話者の位相を考慮した作者の意図が感じ取れそうである。この類は戯作に比して「忠義水滸伝解」「唐詩選唐音」ではほとんど認められずただ「堂ダウ〔忠〕」がしいていえば⑭の例に該当するくらいでこの類に関しては戯作と呼ばれる作品の方が不純な要素を含んでいるといえようか。

四A③△中世の唐音表記の影響の有無▽……近世の唐音表記といっても中世のそれと完全に異なったものではなく逆に共通している部分が多いわけであるが声母あるいは韻母により異なった表記をもつ部分がある。その部分に於いて影響があるかないかを検討するわけである。幸い、中世の唐音表記の大概については奥村氏や高松氏により報告がなされておりそれらを参考にしつつ考えた。その結果として以下に示す様な三点について影響が認められた。

①匣母のワ行表記②「何〔歌韻〕ヲ」〔釈文由縁書月〕

③「和〔支韻〕ヲウ」〔釈文由縁書月〕④「皇〔唐韻合口〕ワン」〔和唐珍解〕

① 匣母のヤ行表記 ㉑「学(驚懸) やつ」(「とうしんのねこと」)

② 蕭韻のeウ表記 ㉒「鳥(篠韻端母) テ。ウ」(「訳文由縁看月」)

㉓「調(蕭韻定母) テウ」(「和唐珍解」)

以上の例くらいである。ところが「忠義水滸伝解」・「唐詩選唐音

」では「湖ウ、忠」(「詩」)・「回オイ、ヲイ(忠)」・「懐ワ

イ(忠)」(「詩」)・「話ワア、ワア(忠)」・「画ワア(忠)」(「詩

」)・「緩ワン(詩)」等々匣母の表記に関しては枚挙に遑なしの

有様である。一方、蕭韻の場合は戯作のみに影響があるのである。

四B(4)△表記法上の工夫の有無▽:これが「これまで全く行なわれ

たことのない表記法が工夫されているかどうか」という検討を意味

するものであればその様な工夫は行なわれていないといわざるを得

ない。しかし「近世前期の頃にな表記法として工夫されていたも

のを取り入れたかどうか」という点では取り入れたと思われるもの

とそうでないものと二種類ある様である。その意味では△伝統によ

る表記法の固定化▽と関連がある。それ故、B(5)△表記形式・表記

法の固定化の有無▽の検討と関連して考えられるところはそのよう

にする。

さて、近世前期ころに行なわれていた表記上の工夫としては黄葉

文献で認められた注意点「○」印と黄葉文献で認められたワリ注記

号「ー」やそれに準じて冠山などにより用いられた「○」印とがそ

の著しいものであろう。その二種の表記について検討してみる。

α注意点「○」印 ㉑「とうしんのねこと」 「和唐珍解」では全く認

められない。一方「訳文由縁看月」では専ら「サ」に付される「○

」が認められる。㉒「哉(哈韻精母) ゴイ」24「再(哈韻精母) サイ

25「纒(哈韻從母) ゴイ」26「在(海韻從母) ゴイ」27「察(點韻穿母)

サツ」㉓「掃(哈韻心母) サウ」がその全例である。この「サ」は「

和唐珍解」や「忠義水滸伝解」・「唐詩選唐音」などでは概ね「ツ

ア」で表記されているもので摩擦音を表現するための工夫とみるこ

とに問題はあまい。しかし「サ」にのみ限定され「ソ」の如く表

現可能なものは「ツヲ」で表現する(注28)といった問題等△伝統による固

定化▽の問題として考えるべき面もあるようである。

βワリ注記号「ー」あるいはそれに準じた「○」印 ㉑ワリ注記号

「ー」は全く認められない。しかし、「○」印の方はある程度認め

られる。「とうしんのねこと」・「和唐珍解」本文では全く認めら

れないが「訳文由縁看月」・「和唐珍解」漢文序では効・流撰の一

部に使用されている。「訳文由縁看月」・「和唐珍解」漢文序とも

に効撰に関しては概ね「好(哈韻精母) ハ。ウ」の如く「○」印が使

用されている(表1参照)。例外としては前述㉑「掃サウ」の例の他

㉒「猫(宵韻明母) ミヤウ」(「訳文由縁看月」) ㉓「料(蕭韻來母) リヤ

ウ」(「訳文由縁看月」) があるにすぎない。所謂「アウ連母音」の長

音化の問題と関わってくるわけだが、一往は唐話に於ける二重母音

をきちんと表記しようとの努力とみられるわけであるがこの「○」

印が使用されない「とうしんのねこと」や「和唐珍解」本文では㉑

「勞(豪韻來母) ロウ」(「とうしんのねこと」) 「和唐珍解」㉒「腦(哈韻

滂母)ノウ」(「和唐珍解」)の如く長母音化した例が認められるため、

「○」印の使用の有無によって簡単に作者の表記姿勢を云々できな

いのである。「○」印の使用されている側は一往表記上の工夫に積

極的姿勢を認めるとしても「○」印の使用されていない側について

は唐話の原音の問題や表記の固定化の問題など考えるべき点が多い

わけである。流撰に関しては「エウ連母音」「イウ連母音」二の長

音化の問題や唐話原音の問題など效撰の場合より一層問題が多くなる。

紙数の関係上、效撰の原音の問題や表記の固定化の問題について問題提起にとどめておく。原音の問題としては豪韻の場合、南京音・四川音など(ㄷ)、広州音(ㄷ)、福州音・上海音(ㄷ)、杭州音(ㄷ)となっており、肴韻の場合、南京音・四川音・広州音・福州音(ㄷ)、上海音(ㄷ)、杭州音(ㄷ)となっており、宵蕭韻の場合、南京音・四川音(ㄷ)、広州音(ㄷ)、福州音(ㄷ)、上海音(ㄷ)、杭州音となつてゐるようである。このいずれが唐音であるかによつて表記の問題に変化が起きるわけである。例えば、豪韻について「和唐珍解」が広州音や上海音の如きものに基いていたとするならㄷ「脳ノウ」などは音をかなり忠実に表記しており、逆に「好ハウ」とするなど(表I参照)は伝統によるA表記法の固定化Vといった問題となつてくるわけである。その様な点で唐音の原音を明らかにすることや作者がいかなる人より唐話を習得したかを明らかにすることなどが必要となるのである。以上問類点は多々あるがそれらの検証は後考にまちたい。

四Cその他右のA、Bでは説明できかねる唐音かな表記も若干存すがこれも今後にまちたい。

五

以上の結果、結論的に大略次のことがいえよう。

(1)「とうしんのねこと」は唐音かな表記の総用例数あるいは異なり字数が少なくその大半に不純な要素が含まれてゐるようである。唐音資料としては補助的にしか使用できない。

(2)「訳文由縁看月」・「和唐珍解」は唐話の原音や作者の伝記研究など明らかにすべき問題がかなり残されてゐるものの内部徴証の面からは戯作であるにもかかわらず非戯作と同様あるいはそれ以上に不純要素をもたない文献であり、「忠義水滸伝解」・「唐詩選唐音」などを唐音資料として利用できるのであれば、それら同様に唐音資料として利用できよう。

以上は内部徴証の面から大略を述べたにすぎず問題が多々残るがそれらは後考にまちたい。大方の御批判・御教示をたまわれれば幸である。

注

- (1) 石崎又造氏「近世日本に支那俗語文学」・中村幸彦氏「上方の唐語学界——『剪燈隨筆』によつて——」(『近世文学叢書』4)・宗政五十緒氏「享保・京都における唐語通たち——松素松峯を中心として——」(『国語研究』31の2)などに詳しくある。
- (2) 「聖遊廓」卷末の「くるはからことば」や「辰巳之圃」などの「唐言」といったものを含めれば種々な形で取り込まれてゐる。えよう。それらについては、前記石崎氏「支那俗語文学」241頁ページ、中野一敏氏「漢文戯作の展開」(『江戸文学と中国』所収)、杉本つとむ氏「近代日本語」146ページなどに詳細な記述がある。
- (3) 有坂秀世氏「江戸時代中国に於けるハの韻音について」その他(『国語音韻史の研究』所収)、奥村三雄氏「日本漢字音の体系」(『訓点語と訓点資料』6)・「近世音韻史料としての黄葉唐音」(『岐阜大学文学部研究報告』5)・「天和三年黄葉版韻音経——近世初期の表記・音韻資料——」(『近代語研究』3所収)など。他に奥村氏「衆分韻略の研究」、中山久四郎氏「唐音十八考」(『東京文理大紀要』3)、山田孝雄氏「国語の中に於ける漢語の研究」などに近世の唐音について触れた部分がある。ちなみに、中世の唐音については水田紀久氏「宋音般若心経」(『国語研究』48)、高松政雄氏「唐音」(『国語研究』41の1)・「唐音統考」(『国語研究』41の7)、湯沢賢幸氏「国語学叢書」本「略韻」の「唐音」(『訓点語と訓点資料』46)・「唐音における喉内鼻音韻尾」(『山形大学紀要』8の2)など諸論がある。
- (4) 『国語学』90集74ページなど。

(5) 注(3)で述べた奥村氏論文に於ける試みを参考として成したところの「静岡女子大学研究紀要」(または、紀要より国語国文関係論文を再編集した「国文研究」)第十一号の拙稿や本稿の表I・表IVはその一例である。

(6) 堂々めくりにもなっているわけだが文献の信頼度を考えるには唐音の実態を把握する必要がある。唐音の実態を把握するには文献の信頼度を確かめておくことが先決というわけである。それ故、「字音表」などで不審な表記形を抜き出して検討することの繰り直しとなる。

(7) 唐音かな表記に関しては、唐話に通じるという語学知識を必要とするため、板下書きや板木師の意識的な改変を受け難いという面があり表記法の責任所在を作者に帰し易い利点があるからである。しかしそのことは反面(意味もわからず原文に忠実かという)機械的作業となるための無意識的な改変が起り易くなるということでもある。

(8) 以上の他に、唐音かな表記の付し方が注記形式の変遷上どの様な位置にあるかといった問題もありそうである。

(9) 小池謙五郎氏『増補日本文学史5 近世Ⅱ第六章江戸草紙 三黒本・青本』の項、783ページ。ただ書名の下に()の注記として記されたのみでその根拠は明らかにされていない。

(10) 「釈文由縁看月」は「近世文学未刊本叢書狂詩狂文篇」に影印があるが、この影印を国学院大本の写真と比較してみた限りでは影印には底木の刷りの悪き故か写真技術の問題故か、かなり不鮮明な部分が認められた。例えば七下表二行目「情一字の唐音かな表記「チン」(国学院大本)が「近世未刊本叢書」では「チ」となっているなど。

(11) 当時、唐話が大流行していたとはいえ、唐音かな表記を趣向の一部にした戯作を本当に理解できる程に十分な語学力を持った者は限られていたであろう。また、それほど繰り返して利用し得る趣向でもなさそうである。以上の点からそれほど多くの手の戯作が出回ったとは考えられない。

(12) 吟書は自作自画を旨とした人物ゆえ文意も自分でなしたと推定した。

(13) 「世間学者氣質」巻一第一「唐人の發言は孔子も時にあはず」にてでてる唐話と「とうしんのねこと」の唐話が非常に類似しているのである。二書の成立の先後関係や作者間の交流など問題が多く影響関係は即断できないが「とうしんのねこと」が青本であることなどから、同書が浮世草紙「世間学者氣質」の一部を使用したと考える方が自然ではなからうか今後の検証にまつ。ただし唐音かなの表記にはかなりの異同があり問題は複雑なようである。以下「とうしんのねこと」の問題の部分を翻字しておく(「世間学者氣質」については翻字されているようなので略す)

(二)オコ、にあるらう人田原藤大夫といふ物とかくからずきてみ、づのた、くつたるやうな文字をこのみ 唐音の素読に論語卷二「字而第一子曰字而時習之」と是もよほとわめきおほへ ねことにもちんふんかんといふゆへ あたりちかき人々藤大夫がねことをきとてとうしんのねことわらいけり(「ウ」らう人田原藤大夫近所の人々に ちんふんかんを物語 まづ日よりよいを天晴月あつはらつきのさゆるを好月 雨のふるを 下雨 雷がなれハ雷かみなりといふ まつ御たいきに よふおいでなされたといふ事を有方来也 久し御ぶた仕たごたれもおかわりも御さぬかという事を久遠徳聚那大家方福屋 先したにこたれといふを請座々々といひます 又茶屋来進あぢやうらゐり他業子也といふハ茶もてきあの人にしんせいいくわしもつてこいといふ事できざる (東洋文庫本のコピーより抄出) 山田孝雄氏「国語の中に於ける漢語の研究」や有坂秀世氏「国語音韻史の研究」で「唐音を知る歌」などというものとして紹介されている。

(14) 有坂氏「国語音韻史の研究増補」212ページ。
「華音韻鏡」の華音は巻初(正確には最初から三丁目の表)に「華音韻鏡名目」として示されている。〇一之五〇二本音〇三之五〇四之二〇五之三〇跳者即跳〇字三跳〇伊二跳下作〇三字〇出與二字下略〇三相通〇入聲断 尾而呼跳首也〇引かば跳はねバ其まゝつまばされ拗音いはあの声に訓」という唐音法則の乱用によって出来た和製唐音が大部分を占めるようである。九大蔵本による筆者の検討によれば次のごときはこの法則の乱用の結果の誤りであろう。◎右・梗拱のン表記◎止拱e表記◎效・流拱のン表記◎山・威拱のオン・in表記◎仮拱のo表記◎痕・魂拱のウン表記◎文拱のオン表記◎登韻のウン表記◎匣・疑母ガ(カ)行表記◎泥・孃母のダ(タ)行表記など。

(15) これらの用語は一種の目安として便宜的に使用したもので近世の唐音の体系等がこれら古い韻書等の分類に属すと考えるものではない。比較対照する際の便宜のためである。

(16) 戯作類にあつては板木の磨減やずれに伴う印刷面の不鮮明は避けられない問題であり諸本を参照すべきものであるが少くとも京大蔵の二本によつても明らかではなかつた。今後の調査にまちがいが末尾のン表記は動かないところ。この種の問題は他にもあり例えば「在(海韻從母)ツフイ」(和唐珍解)・「最(泰韻精母)ツ」(「和唐珍解」)などは各々「ゾアイ」・「ツイ」とあるべき部分の一部欠落とも考えられるわけである。

(17) この場合、「哈韻のオイ表記」の正否という問題もあるのであるが奥古母音[a]の音色の問題など考えるべきものがあり、当面その項目はたてなかつた。ただこの例に

限定していえば「辭タイ」を「は五に通ふ」という法則を乱用して「トイ」にしたと考えるのが自然であろう。

②① この例については「摩(果韻明母)」などからの類推という要素もあるか。「下」については「唐通事和唐内の唐話の「下」には「力」とかなを付し唐人

季路天の唐話の「下」には「ヒヤウ」とかなを付しているのである。類似の例が「妙」(笑韻明母)なのである。和唐内の唐話中では「ヒヤウ」とかなを付し季路天の場合には「ミヤウ」とかなを付してある。これらの点から、唐話を外國語として学んだ者に誤った発話をさせることにより唐話を母國語とする者との人物の描き分けの方法として作者が意圖的に行なった細かな芸と考えるのはうがちすぎであるうか。

②② あるいはこの場合は次項のA中世の唐音表記の影響 ∇ と考えるべきものか。

例えば、中世の唐音では概ね江・宕韻はウ表記をとるようであるが近世の唐音では江・宕韻は概ねン表記をとるのである。それ故に当該文献の江・宕韻でン表記をとるものがあれば一往それをA中世の唐音表記の影響 ∇ と考えようというのである。

②③「堂」の場合ある意味でこれに該当するわけである。

②④ 注③で示した奥村三雄氏・高松政雄氏などの御論考。奥村氏により天和三年ころの黄葉文献に於ける表記上の工夫の報告がなされている。

②⑤ 一般には「ハ行の文字」に付された半濁符を思い浮かべがちであるがここではそれ以外のものについて考えた。なお半濁符の歴史的な発生定着など興味ある問題もあるがそれについては後日の機会をまわりたいと思う。

②⑦ 例えば「初(魚韻二等穿母)ツヲウ」などは「ソウ」などと表記可能であろう。現に「仏遺教経」(黄葉山書林藤屋東七刊、寛文二年謙語)では「ソヲ」表記形が認められる。

②⑧ 「今の所、この様なワリ注記号「一」は、黄葉文献以外、余り例を見ない」(「天和三年黄葉版劇音経」)という奥村氏の言の通りである。

②⑨ 高本漢「中国音韻学研究」・趙元任「現代呉語の研究」による。本文で示した形は大雑把なものであるから正確を期するためには前記二書を参照いただきたい。

②⑩ (補)その後、問題の字音表を「文献探究」2に発表する機会を得た。御参照いただきたい。

(付記) この稿を成すにあたり、文献面では東洋文庫・国学院大学図書館あるいは中野三敏先生の御好意をたまわり、春日和男先生・奥村三雄先生・中川秀雄氏・原日裕氏その他多くの方々から御教示御援助をたまわった。御礼申し上げます。ただしそれら有益な御教示などを十分に生かすことのできなかった点が誠に残念である。

付表及び説明

表工より表IVで效・流・仮・蟹韻についての字音かな表記を示した。「訳文由縁看月」・「和唐珍解」漢文序・「和唐珍解」本文の順に記した。また「和唐珍解」本文では唐話を自國語とするものと外國語とするものとに分け後者の部分は()で示した。韻は便宜上二〇六韻の分類により、泰・夫韻などは別として上・去声のものはそれに対応する平声韻で代表させておいた。声母については「唇音・喉音・牙音・舌音・半舌音・半齒音・齒音」の順で配列した。

最初の予定では唇音や母母に関する字音表も付すつもりであったが紙数の関係上省略する。誠とされたい。なお詳しくは補注で述べた「文献探究」2の字音表を御参照いただきたい。

表I 效 抵

定	透	端	見	匣	曉	影	並	幫	声母	豪 韻
蹈 道	套	到 倒	体告高	豪	好	襖	暴	呆		
タ ○ ウ		タ ○ ウ タ ○ ウ	カ ○ ウ		ハ ○ ウ				看 月	
					ハ ○ ウ				和 珍 序	
タ ウ (タ フ) タ ウ	タ ウ	タ ウ	カ ウ (カ ウ) (ン)	ハ ウ	(ハ ウ)	ハ ウ	ハ ウ	カ イ	和 珍	

宵 韻	孃	見	影	明	並	肴 韻	心	清	精	来	泥
	鬧	狡 覺 交	咬	貌	跑		掃 騷	造	早	老 勞	腦
		キ ヤ ○ ウ					サ ウ サ ○ ウ				
								ツ ア ○ ウ			
	ナ ウ	キ ヤ ウ キ ヤ ウ	ヤ ウ	マ ウ	ハ ン			サ ウ	ラ ウ (ラ ウ)	ノ ウ	

審	心	照	從	日	知	群	喻	影	明	滂
少 燒	咲 笑 小 確 宵	照	憊	繞 饒	朝	僑	瑤	要	猫 妙	鏢
シヤ○ウ			ツヤ○ウ				ヤ○ウ		ミヤウ	ヒヤ○ウ
シヤ○ウ										
シヤウ	シヤウ (スヤウ)		(チヤウ)	ヤウ	シヤウ	チヤウ	キヤウ	(ヤウ)	(ミヤウ) (ヒヤウ)	ヒヤウ

表 II
流 撮

溪	見	匣	影	明	候 韻	来	泥	定	端	曉	蕭 韻
口	構	候 溪 后 厚	嘸	母		料 了	煽	調	鳥	曉	
	キャン	へ○ウ へウ				リヤ○ウ リヤウ	シヤ○ウ		テ○ウ	ヒヤ○ウ	
						リヤ○ウ					
ケウ		へウ (コヘウ)	エウ	(モウ)		(リヤウ) リヤウ		テウ	(ヒヤウ) ヒヤウ		

喻	曉	影	奉	非	尤 韻	精	來	定	透	疑
又右有尤	休	憂	負婦浮	不		走	樓	投頭	透偷	偶
ユウ		ユウ	フエウ	プツツ		ツエウ	レウ	テウ	テウ	
ユウ(ユウウウ)	ヒウ(ヒウウ)		フ(フエウウ)	フ(フツツ)		ツエウ(ツエウウ)	レウ	テウ(テウウ)	テウ	ゲウ(ゲウウ)

邪	從	清	精	喻	尤 韻 (四等)	審	昧	來	孃	疑	見
袖囚	就	楸秋	酒	猶遊由		手	愁	溜	獠	牛	九久
シウ		シユウ	ユウ	ユウ			ツエウ	リウ	チウ		
	ツエウ										キウ
シウ		ツユウ	(ウツユウ)	ユウ ユウ		シウ				ニウ	キウ キウ

表Ⅲ 麻韻 (二等)

孃	澄	見			匣	曉	影	明	幫	影	幽 韻		
拿	茶	嫁	價	假家嘉	暇	下	華	花化	鴉	罵馬		怕把	幼
		キヤア	キヤア	キヤア キヤア キヤア コウ	ヒヤウ			ハア ハア	ヲ	マア			
								ハア ハア					
(ナア)	ツエ	(キヤウ)		(キヤア)	(ヒヤウ)			(ハア)		(マア)		(コウ)	

表Ⅳ 蟹攝

精	來	泥	定	透	疑	溪	曉	影	哈 韻	審	穿	
再	哉	來	耐乃	袋待	態	凝	開	海		愛	紗	差
サ [○] ザ [○]	ライ			タイ		カイ		アイ				
サイ	ライ	ナイ										
サイ	サイ (ライ)	トイ		(タイ)	キイ	カイ	ハイ	(アイ)		(スア)	ツエ	

泥	端	匣	明	並	滂	幫	灰 韻	從	清	
内	對	回	每梅	陪	配	背盃杯		纒	在財才	菜采猜
		ホイ	ムイ ムイ			ホイ		サ [○] イ	サイ [○] イ	
ヌイ	トイ	ホイ		ボイ	(ホイ)	(ホライ) ホイ		(サイ) (ツフイ)	サイ ツア チャウ	(サイ) (サ) (サイ)

見	匣	齊 韻	溪	匣	夫 韻	見	匣	幫	皆 韻	心	從
桂係	攜		快	話		乖皆	懷	拜		碎	罪
			クワイ	ハア、		クハイ	ホイ				
(キン) キイ	ヒイ		(ククワイ) (クワイ)	ハア、		キヤイ	(ハイ)			スイ	(ツイ)

定	透	疑	匣	泰 韻	心	從	精	來	泥	定	端	
大	太	外	會		細	西	齊	賈	禮	泥	啼	帝 涕 底
		ワイ	ホイ			スエイ					テイ	テイ テイ 、
ダア 、												
(タイ タイ アア)	タイ	ワイ	ホ		(スエイ スエイ スエイ)	ツユイ	ツユイ	ツリイ ツイ	ニイ		テイ	

禪	審	心	疑	並	祭 韻	審	見	明	並	佳 韻	精	泥
誓	世	歳	藝	袂		灑	解 街	賈 買	罷		最	奈
スウ	シイ	スイ		ピエイ							ツイ	
							ケイ					ナイ
			ニイ			シヤイ	キヤイ (マイ)	マイ	バハア アア)	(ツイ ツイ イ)		